

看護学生のエイジズムと高齢者看護学実習との関連 —病院実習と福祉施設実習の学習要素からの検討—

佐野望・檜原登志子

Influence of Elderly Nursing Practice on Ageism among Nursing Students : Study of Learning Components in Practical Training in Hospitals and Welfare Facilities

Nozomi SANO, Toshiko HIIHARA

Abstract: The purpose of this study was to confirm that participation in practical training courses on elderly nursing influences and changes ageism of the participants toward elderly individuals. Before and after the practical sessions, we evaluated the prevalence of ageism among third-year college nursing students using the Fraboni Scale of Ageism (FSA). Components that showed changes in ageism due to practice were observed among a group of "students with experience in nursing elderly with dementia" and a group of "students who realized that learning about an elderly individual's life helped them to understand the subject". These results suggest that, through lectures, exercises, and other practical training course activities held during their first and second year, the third-year students had already learned the importance of understanding the elderly and that participating in practical training courses held in the third year helped them to potentiate their existing understanding of elderly people, which further helped to reduce ageism.

Keywords : エイジズム ageism, 看護学生3年生 third-year nursing students, 高齢者看護学病院実習 elderly nursing hospital practice, 高齢者看護学福祉施設実習 elderly nursing welfare practice, 認知症高齢者 elderly with dementia

I. 緒 言

高齢社会に並行して、認知症高齢者が増加し、介護保険施設入所者の9割を占めている¹⁾。よって、看護学生が高齢者看護学実習で認知症高齢者と出会う機会も多いと予測される。

認知症高齢者との意思の疎通の困難さは看護援助の困難さに関連する²⁾。そして、高齢者へ対する否定的な感情を持つことがエイジズムを強くし、高齢者とのコミュニケーションを阻

害する要因となり³⁾、看護の質を左右させてしまう⁴⁾。特に看護学生は認知高齢者を受け持ち看護展開する際の不安や焦り、いらいら、怒りといった心情の困難感を抱いている⁵⁾。これまで、看護学生が高齢者へ対してどのようなイメージを抱き、そのイメージが実習を体験することで肯定的イメージへと変化することが報告されてきた^{6,7,8)}。また、認知症高齢者看護の体験が、認知症高齢者の対象理解を深め感心が深まり好意的な受容感情を育む^{9,10,11)}ことも報告さ

れている。しかし、実習体験が高齢者に向けての感情や態度に変化を及ぼす学習要素については実証されていない。そこで、基礎教育における高齢者看護学実習の体験が、どのように感情や態度を示すエイジズムに何らかの影響を与えているかを明らかにすることは、教育上重要であり、有益であると考え調査報告する。

II. 用語の定義

1. エイジズム

E. B. Palmore のエイジズムの定義は、ある年齢グループに対する偏見もしくは差別であるとし、偏見は否定的な固定観念あるいは否定的態度であり、差別とは否定的に扱うことと述べている¹²⁾。よって、本研究におけるエイジズムは、高齢者に対する偏見と差別とする。

2. リフレクション

リフレクションについては、J. Dewey の「経験の質」を高め、経験から学ぶ教育の提唱に発し、D. Schon は、学問的知識と専門的実践の分離を克服するため、状況との反省的対話とした¹³⁾。C. Bulman は、看護実践の経験を振り返るプロセスであり、記述、分析、評価を行う手段でもあり、また、実践から学ぶということはどういうことかを理解するための方法であると述べている¹⁴⁾。よって、本研究では、高齢者に実施した援助を客観的に振り返り、記述し、状況問題を分析し、次の援助を考えられる事をリフレクションと捉える。

III. 研究目的

看護学生の実習前後におけるエイジズムの変化と、エイジズムを変化させる実習の学習要素について明らかにし、その内容について考察する。

IV. 研究方法

1. 調査対象

A 短期大学看護学科3年生96人中の承諾の得られた学生で、実習前は95名99%、実習後は72

名75%であった。

高齢者看護学の科目進度は、1年次の後期に「高齢者看護学概論」にて、加齢に伴う様々な変化や我が国における高齢化、社会保障、社会資源などについて学習する。また、高齢者の疑似体験も実施する。2年次前期には、「高齢者看護活動論」として高齢者患者の援助の特徴について学習し、同学期6月の「高齢者看護学実習Ⅰ」（以後実習Ⅰとする）では、地域で生活する高齢者を対象としたデイサービスセンターで実習をする。ここで高齢者との関わりを持ち、中には認知症高齢者と関わる学生もいる。後期には「高齢者看護活動演習」の科目で、高齢者に多い疾患を持つ2事例の看護過程を展開する。事例1では「大腿骨頸部骨折により人工骨頭置換術を受けた高齢者」、事例2では「福祉施設に入所している認知症高齢者」を対象として看護を展開する。事例2の演習では、訓練を受けた模擬患者を外部より招き、帰宅願望のある認知症高齢者の設定で、行動の現象からその心理状況を生き立ちからくみ取り、どのように関わることがその人の理解ある関わりになるのかを考え演習する。3年次には、特別養護老人ホームでの「高齢者看護学実習Ⅱ」（以後福祉施設実習とする）、病院での「高齢者看護学実習Ⅲ」（以後病院実習とする）の実習をしている。3年次の実習はいずれも利用者あるいは患者を1名受け持ち、看護過程を展開している。さらに対象を理解するためにその人の「生きてきた道年表」を作成し、社会的な出来事とその人自身の大まかな歴史を本人や家族から話を聞き、その語りから印象に残った内容と看護ケアに生かしたことを整理し実習記録の一部としている。実習指導では、①実施した援助を客観的に振り返り、自己の行動の問題点に気づけるよう助言する。②自己の行動の問題点を的確に記述できているか確認する。③状況や問題が分析できるよう助言する。④反省を含めて問題点を記述できるように助言する。⑤以上の思考過程が実習記録に反映できているかを確認する。以

上の段階を意識して指導している。

2. 調査方法

1) 調査内容

(1) エイジズムの調査

原田ら¹⁵⁾が開発した日本語版 Fraboni エイジズム尺度 (FSA) 短縮版14項目 (以下 FSA) を用いた。回答方法を「大変そう思う」「そう思う」「あまり思わない」「全く思わない」の4肢より1択とし、1～4点に配点し得点化した。つまり、得点が高いほどエイジズムは低い結果となる。

(2) 実習後の振り返り調査

行為過程のリフレクション¹⁶⁾を用いた。内容は、設問項目を自由記述とした。項目は、①自分と利用者との関わりを振り返って自分の行動の問題に気づいた場面を具体的に記述する。内面の感情を振り返るため、②自分自身の感情を表現している箇所に赤で下線を引く、自分自身の行動を表現している箇所に青で下線を引く。③問題行動の状況をよりよくするために、どのような援助が考えられるか、反省も含めて記述する、とした。

(3) 調査時期

平成21年の4月、12月である。

2) 倫理的配慮

関連組織の倫理委員会の承諾を得て、対象には文書と口頭で主旨を説明し、質問紙の提出により同意を得た。調査の参加は自由意志であること、無記名で個人は特定されないこと、データは本研究以外には使用しないこと、参加しないことにより何ら不利益を得ないこと、成績には何も影響しないことを説明した。

3) 分析方法

記述統計に加え、実習前後の FSA の項目毎の平均値の差の検定と、実習後は認知症高齢者看護の体験の有無による FSA の平均値の差を検定した。また、学習要素項目が対象の理解に役立ったと感じた学生とそうではなかった学生とによる FSA の平均値の差を検

定した。

統計ソフトは SPSS Version 13.0を使用した。

実習後の振り返り調査では、看護行為過程の描写を自由に記述した文章を「学生の語り」として読み、FSA の統計的有意差のみられた項目に関連している内容の意味について検討した。

V. 結 果

1. FSA の実習前後の平均値の差 (表 1)

実習前後の FSA の平均値の差に有意差は認められなかった。変化を示した項目は問4「高齢者に会うと、時々目を合わせないようにしてしまう」が実習後にエイジズムが有意に低くなった傾向「 $t(162) = -1.73, p < .1$ 」として示した。

2. 認知症高齢者看護体験の有無による FSA の平均値の差 (表 2)

実習後の認知症高齢者看護体験の有無における FSA の平均値の差に有意な差が認められた。福祉施設実習の間2「多くの高齢者は古くからの友人でかたまって新しい友人をつくることに興味がない」に看護体験がある学生にエイジズムが有意に低く「 $t(67) = 3.33, p < .005$ 」見られ、病院実習の間14「ほとんどの高齢者は、同じ話を何度もするのでイライラさせられる」は看護体験がある学生にエイジズムが有意に低く「 $t(38.72) = 2.74, p < .05$ 」見られた。

3. 「生きてきた道年表」が対象の理解に役立ったと感じた学生と感じなかった学生による FSA の平均値の差 (表 3)

実習での対象の理解に役立った学習内容として、「生きてきた道年表」を選択した学生と選択しなかった学生との FSA の平均値の差については、病院実習・福祉施設実習共に有意な差を示す値が得られた。

福祉施設実習では5項目に「生きてきた道年表」が対象を理解するのに役立ったと感じた学生にエイジズムが有意に低い値を示した。それ

表1. 実習前後のFSAの平均値の差の検定

FSA		前後	N	平均値	有意 確率
問1	多くの高齢者(65歳以上)はけちでお金を貯めている	前	94	2.95	
		後	71	2.92	
問2	多くの高齢者は古くからの友人でかたまって新しい友人をつくることに興味がない	前	94	2.98	
		後	71	2.97	
問3	多くの高齢者は過去に生きている	前	94	2.79	
		後	71	2.82	
問4	高齢者に会うと、時々目を合わせないようにしてしまう	前	94	3.22	†
		後	70	3.41	
問5	高齢者が私に話しかけてきても、私は話をしたくない	前	94	3.59	
		後	71	3.59	
問6	高齢者は、若い人の集まりに呼ばれた時には感謝すべきだ	前	94	3.41	
		後	71	3.45	
問7	もし招待されても、自分は老人クラブの行事には行きたくない	前	94	3.19	
		後	71	3.08	
問8	個人的には、高齢者とは長い時間を過ごしたくない	前	94	3.24	
		後	71	3.15	
問9	高齢者には地域のスポーツ施設を使ってほしくない	前	94	3.65	
		後	71	3.61	
問10	ほとんどの高齢者には、赤ん坊の面倒を依頼して任すことができない	前	94	3.17	
		後	70	3.26	
問11	高齢者は誰にも面倒をかけない場所に住むのが一番だ	前	94	3.55	
		後	71	3.63	
問12	高齢者とのつきあいは結構楽しい	前	94	3.06	
		後	71	3.15	
問13	できれば高齢者と一緒に住みたくない	前	94	3.15	
		後	71	3.14	
問14	ほとんどの高齢者は、同じ話を何度もするのでイライラさせられる	前	94	3.19	
		後	71	3.13	

† = p < 0.1

看護学生のエイジズムと高齢者看護学実習との関連

表2. 認知症高齢者看護の体験の有無によるFSAの平均値の差の検定

FSA		有無	福祉施設実習			病院実習		
			N	平均値	有意確率	N	平均値	有意確率
問1	多くの高齢者(65歳以上)は けちでお金を貯めている	有	62	2.90		22	3.00	
		無	7	3.14		47	2.89	
問2	多くの高齢者は古くからの友人 でかたまって新しい友人をつくる ことに興味がない	有	62	3.05	***	22	2.91	
		無	7	2.43		47	3.02	
問3	多くの高齢者は過去に生きている	有	62	2.87		22	2.82	
		無	7	2.57		47	2.85	
問4	高齢者に会うと、時々目を合わせ せないようにしてしまう	有	61	3.39		22	3.55	
		無	7	3.57		46	3.35	
問5	高齢者が私に話しかけてきて も、私は話をしたくない	有	62	3.56		22	3.64	
		無	7	3.71		47	3.55	
問6	高齢者は、若い人の集まりに呼 ばれた時には感謝すべきだ	有	62	3.44		22	3.55	
		無	7	3.57		47	3.40	
問7	もし招待されても、自分は老人 クラブの行事には行きたくない	有	62	3.13		22	3.27	
		無	7	2.86		47	3.02	
問8	個人的には、高齢者とは長い時 間を過ごしたくない	有	62	3.16		22	3.32	
		無	7	3.14		47	3.09	
問9	高齢者には地域のスポーツ施設 を使ってほしくない	有	62	3.60		22	3.59	
		無	7	3.57		47	3.60	
問10	ほとんどの高齢者には、赤ん坊 の面倒を依頼して任すことがで きない	有	61	3.23		22	3.41	
		無	7	3.43		46	3.17	
問11	高齢者は誰にも面倒をかけない 場所に住むのが一番だ	有	62	3.61		22	3.59	
		無	7	3.71		47	3.64	
問12	高齢者とのつきあいは結構楽し い	有	62	3.13		22	3.23	
		無	7	3.29		47	3.11	
問13	できれば高齢者と一緒に住みた くない	有	62	3.16		22	3.18	
		無	7	3.00		47	3.13	
問14	ほとんどの高齢者は、同じ話を 何度もするのでイライラさせら れる	有	62	3.13		22	3.41	**
		無	7	3.14		47	3.00	

***=p<0.005

**=p<0.01

表3. 生きてきた道年表を対象の理解に役立ったと感じた学生と役立ったと感じなかった学生とのFSAの平均値の差の検定

FSA	役立つ	福祉施設実習			病院実習		
		N	平均値	有意確率	N	平均値	有意確率
問1 多くの高齢者(65歳以上)は けちでお金を貯めている	役立つ	20	3.05		19	3.05	
	役立たない	51	2.86		52	2.87	
問2 多くの高齢者は古くからの友人 でかたまって新しい友人をつくる ことに興味がない	役立つ	20	3.05		19	2.95	
	役立たない	51	2.94		52	2.98	
問3 多くの高齢者は過去に生きてい る	役立つ	20	2.85		19	2.84	
	役立たない	51	2.80		52	2.81	
問4 高齢者に会うと、時々目を合わ せないようにしてしまう	役立つ	20	3.70	*	19	3.68	*
	役立たない	50	3.30		51	3.31	
問5 高齢者が私に話しかけてきて も、私は話をしたくない	役立つ	20	3.65		19	3.63	
	役立たない	51	3.57		52	3.58	
問6 高齢者は、若い人の集まりに呼 ばれた時には感謝すべきだ	役立つ	20	3.55		19	3.53	
	役立たない	51	3.41		52	3.42	
問7 もし招待されても、自分は老人 クラブの行事には行きたくない	役立つ	20	3.35	*	19	3.32	
	役立たない	51	2.98		52	3.00	
問8 個人的には、高齢者とは長い時 間を過ごしたくない	役立つ	20	3.45	*	19	3.42	*
	役立たない	51	3.04		52	3.06	
問9 高齢者には地域のスポーツ施設 を使ってほしくない	役立つ	20	3.80	*	19	3.74	
	役立たない	51	3.53		52	3.56	
問10 ほとんどの高齢者には、赤ん坊 の面倒を依頼して任すことがで きない	役立つ	19	3.32		19	3.32	
	役立たない	51	3.24		51	3.24	
問11 高齢者は誰にも面倒をかけない 場所に住むのが一番だ	役立つ	20	3.75		19	3.74	
	役立たない	51	3.59		52	3.60	
問12 高齢者とのつきあいは結構楽し い	役立つ	20	3.40		19	3.26	
	役立たない	51	3.06		52	3.12	
問13 できれば高齢者と一緒に住みた くない	役立つ	20	3.35		19	3.32	
	役立たない	51	3.06		52	3.08	
問14 ほとんどの高齢者は、同じ話を 何度もするのでイライラさせら れる	役立つ	20	3.35	*	19	3.37	*
	役立たない	51	3.04		52	3.04	

*=p<0.05

らは、問4「高齢者に会うと、時々目を合わせないようにしてしまう」[$t(68)=2.41, p<.05$], 問7「もし招待されても、自分は老人クラブの行事には行きたくない」[$t(69)=2.3, p<.05$], 問8「個人的には、高齢者とは長い時間を過ごしたくない」[$t(69)=2.3, p<.05$], 問9「高齢者には地域のスポーツ施設を使ってほしくない」[$t(48.8)=2.21, p<.05$], 問14「ほとんどの高齢者は、同じ話を何度もするのでイライラさせられる」[$t(69)=2.06, p<.05$]であった。

病院実習では3項目に「生きてきた道年表」が対象の理解に役立ったと感じた学生にエイジズムが有意に低くなった。それらは、問4で[$t(45.9)=2.6, p<.05$], 問8では[$t(69)=2.0, p<.05$], 問14は[$t(69)=2.2, p<.05$]を示した。

4. FSAの有意差の見られた問に関連したリフレクションの自由記述

1) 実習全体による振り返り

FSAの実習後に有意な傾向を示した。福祉施設実習と病院実習で対象を理解するうえで役に立ったと感じた学習要素「生きてきた道年表」に有意な差を示した問4「高齢者に会うと、時々目を合わせないようにしてしまう」に関連して、振り返りの記述では次の内容があった。「毎日話かけたが反応がない方に、積極的に話せばよかったと思い、反応がなくても表情から高齢者の気持ちをくみとれると思った」であった。

2) 認知症高齢者看護の体験に関連した振り返り

福祉施設実習で認知症高齢者看護を体験した学生にエイジズムが有意に低くみられた問2「多くの高齢者は古くからの友人でかたまって新しい友人をつくることに興味がない」に関連した記述では、「受け持ちの利用者ばかりに話しかけていたら、同じユニットの隣の席に座っていた利用者が『私なんていいのよ。話す価値なんてないのよ』と怒られた。

少したってから、その人に話しかけたら笑顔で話してくれた。病院ではなく特別養護老人ホームではユニットケアの集団生活を大切にしていこうと学んだ」があった。

病院実習で認知症高齢者看護を体験した学生のエイジズムが有意に低く見られた問14「ほとんどの高齢者は、同じ話を何度もするのでイライラさせられる」では、「何かしたいという気持ちが強すぎると相手に気を遣わせる。あえて何もせず温かく見守る、受け身になる援助を考えた」の記述が関連していた。

VI. 考 察

1. 3年次実習前までの学習によるエイジズム

3年次の実習前後のエイジズムの変化はほとんどなかった。これは、バトラーが述べるエイジズムの要因として、知識の欠如や様々な高齢者との関わりの不十分さ¹⁷⁾があげられるが、1年次の高齢者看護学概論における学習や高齢者疑似体験、2年次の実習Iでの様々な高齢者との関わりの体験、模擬患者参加型演習での認知症高齢者との対応の体験が、高齢者への偏見や先入観を低下させていると考えられる。

実習Iは、高齢者実習を実践する前に重要な体験として健康的な高齢者と関わり対象を理解する実習¹⁸⁾となっていること、模擬患者参加型演習では、演習後の模擬患者との交流により、認知症高齢者自身の世界からコミュニケーションの在り方を見つめ直すことができ、学生の認知症高齢者ケアへの興味・関心が刺激される¹⁹⁾効果があるなど、3年次実習前の段階でエイジズムの要因である知識の欠如や様々な高齢者との関わりの不十分さの補いが出ていていると考えられる。

2. 「生きてきた道年表」による高齢者の理解とエイジズムの関連

3年次の実習では、対象となる高齢者の背景を理解しよう、昨日との違いはあるのかという小さな変化も捉えようとじっくり関わる経験を通して、エイジズムに変化を及ぼした。それは

福祉施設・病院実習ともに、FSAの問4、問8、問14に有意な差の値を示したことから理解できる。これは、目を合わせたコミュニケーション、共に過ごす長い時間、同じ話を繰り返す会話などが大切であることを実感できた結果である。また、実習の振り返りで、言葉の反応が返ってこなくてもその人の目や表情を見て反応を知ろうとし、その反応を感じ取れたことが学びとなったことがじっくり関わる体験からの学生の反応であることを示している。これは、「語る一聴く」の2者関係の相互作用の進展とともに、次第に親密さが形成され両者間の関係づくりともなり²⁰⁾、エイジズムの低下に関与したと考えられる。

よって、高齢者の一般的理解からさらに受け持つ高齢者個人を理解したいという態度がエイジズムを低くする可能性があると考えられる。

3. 認知症高齢者看護体験の効果

認知症高齢者看護を体験した学生に、エイジズムが有意に低い結果が得られた2項目から、以下の点が明らかになった。

福祉施設実習における問2では、ユニットケアの体験を通して、利用者全体に気を配るコミュニケーションの必要性に気が付いた。病院実習における問14では、認知症高齢者との対応で困難に立ち向かい、表情から何を表現しているのか懸命に知ろうとして、認知症の人の本質に迫ろうとした。認知症高齢者を集団として捉える講義の学習ではなく、一人の人を受け持ち共に行動をする実習では、認知症の症状である部分ではなく学生への笑顔や心配りを受ける体験から、その人を全体として捉えることができるようになり、偏見をもたなくなる²¹⁾のではないかと考えられる。これらは、認知症のみを意識したかわりから一歩前進して思考しようとし、自尊心を支えて個人特性を知ろうとする心理の表れ²²⁾であり、肯定的な心理が対象の新たな一面やケアの糸口の発見となる²³⁾と考えられる。よって、学生自身に何か変化をもたらしたいという実践知が生まれ前進した実践の試

みにつながっている。これらの結果から、認知症高齢者は学生へ思考を促していると言える。

Ⅶ. 結 論

3年次の実習前後におけるエイジズムの変化は、大きな変化として表れなかった。しかし、FSAの項目ごとに見てみると、エイジズムが低下している変化をとらえることができた。3年次の実習におけるエイジズムの変化は、一般的な高齢者へのエイジズムではなく、実習対象となる個人の高齢者への理解や関心が高まることで、さらにエイジズムが低くなった。これは、その人の生きてきた歴史を知ることさらに高齢者個人の理解になっていた。また認知症高齢者看護の体験がエイジズムに変化をもたらしていた。よってエイジズムの低下に、高齢者看護学実習は有効であり、対象の理解を深めることと認知症高齢者看護を体験することはさらにエイジズムを低下させることが明らかになった。

本研究では、3年次実習前後のエイジズムの変化を中心に考察してきたが、高齢者看護学の全体を通じた調査からエイジズム低下への効果を考察し、授業や演習の工夫に役立てていきたいと考える。

Ⅷ. 謝 辞

本研究にご協力くださいました看護学生の皆さまに心から感謝申し上げます。

付記 本研究結果の一部は、第41回日本看護学会老年看護(2010年9月)で発表した。

引用文献

- 1) 社団法人 全国老人保健施設協会編：平成21年版 介護白書一介護老人保健施設経営の持続的発展のために一、東京、TAC出版、p 92-94、2009.
- 2) 松田千登勢、佐瀬美恵子、長畑多代、他：痴呆高齢者の問題行動の経験頻度とその認識について—老人保健施設の職員アンケー

- ト調査による解析一、大阪府立看護大学紀要, 6(1), p 41-49, 2000.
- 3) 高野真由美：看護学生のエイジズムが老人とのコミュニケーション時の情緒状態に与える影響, 川崎市立看護短期大学紀要, 15(1), p 47-51, 2010.
- 4) 小川妙子：看護学生の高齢者へのエイジズム—1年生と3年生のFAQの比較一, 順天堂医療短期大学紀要, 12, p 35-45, 2001.
- 5) 嶋田美香, 久原佳身, 石橋富貴子, 他：学生が認知症高齢者と接するときを感じる困難感の内容とその対処行動, 九州国立看護教育紀要, 9(1), p 8-14, 2006.
- 6) 前畑夏子, 服部ユカリ, 成瀬優知, 他：老人看護実習による看護大学生の老人イメージの変化, 富山医科薬科大学看護学会誌, (2), p 103-116, 1999.
- 7) 沖中由美, 中野静子：看護学生がいだく老年イメージ—老年看護学の講義および実習前後の変化—, 愛媛県立医療技術短期大学紀要, (14), p 43-48, 2001.
- 8) 吉本知恵, 横川絹恵：看護学生の痴呆性高齢者に対するイメージと看護観および影響因子, 日本看護学教育学会誌, 14(1), p 35-45, 2004.
- 9) 千葉京子：介護老人保健施設実習における認知症高齢者ケアの学び, 日本赤十字武蔵野短期大学紀要, 18, p 43-49, 2005.
- 10) 千葉京子, 草地潤子：介護老人保健施設における認知症高齢者との関わりで看護学生が対応困難となる場面の特性, 日本赤十字武蔵野短期大学紀要, 19, p 9-16, 2006.
- 11) 山本海夏, 中島洋子：看護学生の認知症高齢者に対する認識と受容感情—実習での受け持ち経験の有無による比較一, 第37回日本看護学会論文集老年看護, (株)日本看護協会出版会, p 112-114, 2006.
- 12) E. B. Palmor, 鈴木研一訳：エイジズム—高齢者差別の実相と克服の展望, 東京, 明石書店, p 19-42, 2002.
- 13) D. A. Schon : The Reflective Practitioner. Temple Smith, 1983.
- 14) S. burns, C. Bulman, 田村由美監訳：看護における反省的実践—専門的プラクティショナーの成長, 東京, ゆるみ出版, p 181-199, 2005.
- 15) 原田謙, 杉澤秀博, 杉原陽子, 他：日本語版 Fraboni エイジズム尺度 (FSA) 短縮版の作成—都市部の若年男性におけるエイジズムの測定一, 老年社会学, 26(3), p 308-319, 2004.
- 16) 田村由美, 藤原由佳, 中田康夫, 他：オックスフォード・ブルックス大学におけるリフレクションを活用した看護教育カリキュラムの背景と概要, Quality Nursing, 8(4), p 321-327, 2002.
- 17) Robert N. Butler : Why Survive ? Being Old in America, 1975, 内菌耕二監訳, 老後はなぜ悲劇なのか? アメリカの老人たちの生活, 東京, メヂカルフレンド社, p 14-19, 1991.
- 18) 村田日出子, 小野田真弓, 高野真由美：看護学生のエイジズムに関する要因—老年看護学概論および実習前後のエイジズムの変化—, 神奈川県立よこはま看護専門学校紀要, 4, p 12-17, 2008.
- 19) 塚本都子：認知症高齢者模擬患者の参加型演習における教育効果—コミュニケーションに焦点をあてた分析から—, 第40回日本看護学会論文集, 老年看護, 日本看護協会出版会, p 147-149, 2009.
- 20) 原祥子：老年看護実践におけるライフストーリー・アプローチの可能性, 老年看護学, 12(2), p 23-27, 2008.
- 21) 前掲8)
- 22) 中野雅子, 徳永基与子, 西尾ゆかり：認知症高齢者との交流場面における看護学生の心理的特徴—プロセスレコードによる内容分析—, 滋賀医科大学看護ジャーナル,

- 8(1), p 34-37, 2010. 高齢者に看護学生が抱いた感情, 藍野学院
23) 西村美里, 大町弥生, 中山由美: 認知症 紀要, 22, p 11-21, 2008.